

えることができる。SB7150出土の土器は、SK219様式（天平宝字末年頃）とSK2113様式（宝亀末年頃）のそれぞれに共通する要素をもっているが、SK2113様式により近いといえる。これからみると、B期の造営時期は天平末年を遡らず、おそらく、天平宝字年間におかれる可能性が高い。

C期の年代を示す資料には、SD7175の出土土器がある。SD7175の土器はSE311様式（天長頃）に似た様相を示している。C期の下限が平安時代に降ることは間違いない。

このような年代観から、この地区のA期のうちに既に「第二次内裏」が成立していたことは疑いなく、両者はかなり早い段階から併存したことが明らかとなった。この地区の性格の究明が急がれるわけであるが、現在の時点では、この地区を、「中宮」、「中宮院」、あるいは「西宮」といった「内裏」と密接な関係にある場所とする蓋然性の強いことを指摘するに留めたい。

第73次調査

第73次発掘調査は、第2次内裏築地回廊の東南部分とその南にある東楼跡の土壇周辺について面積約36aを行っている。内裏内部の調査はすでに第3・9・12次等で若干行っており、内裏の正殿を始めとする建物群、築地回廊などを確認している。調査は現在進行中であり、報告では検出した遺構の概要を記述するにとどめておく。

検出した遺構は、内裏地区で東面・南面築地回廊、礎石建物1、門2、掘立柱建物6以上、柵、古墳周塹の一部である。東楼跡周辺では、礎石建物1、柵列1などを検出した。

築地回廊は、南面・東面ともすでに発掘した部分の延長で、今回は隅の部分を調査した。回廊の保存状態は南側の部分がとくに良好で、築地積土本体と寄柱礎石、叩きしめた回廊床面、側柱礎石抜取穴、凝灰岩切石の雨落溝、雨落溝と側柱礎石との間には凝灰岩切石の石敷が残っていた。東面の築地回廊では入隅から11間目のところに東の一の門が開いており、門の礎石抜取穴を築地中

央通りに二ヶ所確認した。南面回廊では東寄りに7間×4間の礎石建物が築地本体にまたがって検出された。この建物は、南側の柱列を南面築地の南側柱列に合わせて、また北側は築地回廊の雨落溝を建物分だけ張り出させ、建物の雨落ちとしている。この建物は、築地寄柱と柱位置の関係や、床面、雨落溝からみて築地回廊と一連の造営によるものとみられる。階下に築地を包みこんだ楼閣風の建物と推定される。建物の基壇まわりには凝灰岩の切石が部分的に残存している。

この建物から西側2間目の南面築地回廊に門を検出した。おそらく木簡などに記された「角門」に当るものと思われる。なお、築地回廊東南隅の南側部分は後世の水田造作によって大きく削り取られている。

築地回廊の内側では掘立柱建物6棟分を検出した。先の楼閣風建物の北には礎石建物と南北の妻通りを合わせた7間×1間の東西棟建物があり、礎石建物との間を階段でつないでいる。この東西棟建物の北には3間×2間の東西棟をはじめ柱間の狭い建物がある。このほか築地回廊造営以前に築かれた東西方向の柵列があるが、回廊内の東寄りで南北の柵列と接しているようである。

なお発掘地域は、第9次調査及び電探で確認した神明野古墳の墳丘及び東側の周塹の部分に当っており、墳丘裾の部分で一部埴輪が遺存していた。

東楼跡の調査は、旧来からの土壇を中心に行っている。土壇は大半が後世の積土で、わずかに高さ1mほどの基壇が残るにすぎない。この基壇上には、礎石位置が根石などからほぼ確かめられたが、現在までに基壇規模、建物の状態については明確でない。

この楼跡の西側には南北方向の柵列があり、先の内裏内方の東西方向柵列と結ぶものである。

出土遺物では、鬼瓦（カッタ）を始め、瓦類・土器類がある。軒瓦では、6225-6663型式の瓦が顕著である。ほかに6133-6732型式も多く、また藤原宮式の瓦も認められる。